論文審査の結果の要旨

氏名　塩原朝子

スンバワ語はインドネシアのスンバワ島で話されているオーストロネシア系の言語である。本論文は，現地でのフィールドワークに基づいて，この言語をはじめて包括的に記述したものである。

インドネシアでは 700 以上の言語が話されているが，その大多数は研究が不十分である。スンバワ語も，インドネシア政府による文法書と地元研究者による若干の研究があるものの，音声・音韻，形態についての記述が中心で，統語と意味の記述はほとんどなされていない。本研究は，形態記述を精密化するとともに，統語と意味に関する本格的な記述を行なったものである。

本論文の第３章までは導入部で，その中心は第４章以降の文法論にある。

まず，第４章は形態論で，主に語形成を扱う。具体的には，語形成に関わる６つの接辞を取り上げ，その意味・用法を実例とともに詳細に記述している。

第５章は文の構造を取り上げる。この言語は自動詞の他動詞化，他動詞の自動詞化はあるが，他動詞文におけるいわゆる「態」の転換は観察されない。スンバワ語は補語の語順が比較的自由で，多くの言語で態の転換によって示される意味的・談話的機能が語順によって担われていることを明らかにする。そして，他動詞を述部とする文における態のシステムの単純さこそが，スンバワ語を近隣の同系言語から区別する大きな特徴である，と明確に論じている。

第６章では，述部内で否定，アスペクト，ムードなどを表わす文法的要素の意味を扱う。否定辞がアスペクト・ムードなどの要素と組み合わさって多様な否定形を生み出している点をこの言語の特徴として詳しく述べている。

第７章では叙法辞の意味を分析する。４つの叙法辞を詳細に記述しているが，特に説得力を持つのが *si* の分析である。*si* は４つの異なる用法を持つが，いずれも何らかの「対比」を表わすものとして一般化することに成功している。

第８章では複文の構造を取り上げ，関係節，補文，重文などを扱う。

第９章は指示詞である。通常の近称，中称，遠称，不定称の他に，「場面指示」そのものを表わす *tó’* の存在を指摘し，これを聞き手の関心を引く機能のみを持つ指示詞と位置付けている点が際立つ。

この論文は，記述の繰り返しや，関連する事柄が別々に述べられている箇所があり，論述の構成に一工夫あればもっと分かりやすくなったものと思われる。しかしながら，ほとんど研究のなかった言語を自ら集めた資料に基づいて包括的に記述し，その特徴を明らかにした功績はその弱点をはるかに上回る。本審査委員会は，本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断した。